

防災・減災のページ

第106回巡回ワークショップ

@仙台銀座親和会

むすび塾

阿部さんは震災の津波で店が被災。店を再開した後の2012年12月、営業中に津波警報が発令され、閉店の判断に苦慮した。

幹事の菊地健さん(46)が経営する「メインバー・オークルーム」には地震発生直時、飲食客の姿があった。「カウンターの下に入るよう呼びかけたが、動けない人もいた。お客さんへの対応など、仙台銀座で足並みをそろえてできるものがほしい」と語った。

震災時、仙台銀座は被害がほとんどなかったという。一方で昨年2月と今年3月に宮城、福島両県で最大震度6強を観測した地震では、ガラスや瓶が落ちて割れる被害が相次いだ。

幹事の「お菜晩酌志保」経営古川志穂さん(48)は「お客さんはいなかったが、店内はめちゃくちゃ。自分は動けず、避難するよう声をかけてくれた隣の店主がお客さんを誘導する姿を見て震災経験者は違ふと思った」と振り返った。

東北大災害科学国際研究所の佐藤翔輔准教授(40)、東日本大震災を機に同業者らと夜の避難訓練を実施する石巻市の日本料理店「八幡家」おかみの阿部紀代子さん(60)が助言者として議論に加わった。

中心部飲食店街の備え

河北新報社は3日、106回目の巡回ワークショップ「むすび塾」を仙台市青葉区中央の町内会「仙台銀座親和会」で開いた。仙台市中心部にあり、飲食店やビルが建つ一角は昼夜問わず多くの人が行き交う。宮城県内で自然災害が頻発する中、町内会役員を中心に経営者や住民ら8人が災害の備えと利用客の安全確保について話し合った。

■むすび塾に参加して

●まず連絡網整備 仙台銀座は戦後復興を支えてきた場所。老朽化が進む建物や古い看板など危険な箇所がたくさんある。まず取り組みたいのが連絡網の整備。「作った」で終わらないように、きちんと機能するようにしたい。町内会の備蓄品の準備も急ぎたい＝町内会長・横山芳夫建築設計監理事務所社長・横山英子さん(59)



●覚悟持たないと 昨年、今年の大地震発生時に店には、お客さんがいなかった。いたらどうなったか考える一方、被害が少なく慣れっことになった自分もいる。日々商売に追われて防災はつい後回しにしていたが、覚悟を持って取り組みなくてはならないと感じた＝町内会副会長・もんじゃ焼き下町や経営・長島寿春さん(60)



●防災力高めたい 過去に被害がほとんどなかったの、防災を深く考えたことがなかった。今まで大丈夫だから今後も大丈夫だという保証はない。商売を続けるためにはもちろん、お客さんのため、地域のために何ができるかをみんなで話し合い、仙台銀座の防災力を高めたい＝町内会会計幹事・味処花夕経営・中鉢祐一さん(67)



●火災対策考える 震災の時は青葉区の国分町の店で働いていた。街全体がパニック状態だった。経験を踏まえ、店の高い所に重い物を置かないなどの対策をしている。ガスを多く使うため、火災の備えも常に考えなければなら



ない。皆さんの話を今後の備えに生かしたい＝町内会幹事・焼肉ホルモン伽楽経営・斎藤政視さん(43)

●階段降下安全に 約4年前に初めて店を開いた。ここ2回の地震で高い所に置いていたグラスや日本酒の瓶が落ち、怖い思いをしたので低い場所に移した。店は2階で急な階段がある。お客さんに安全に下りてもらうための対策を考えないといけない。皆さんの経験に学び備えたい＝町内会幹事・お菜晩酌志保経営・古川志穂さん(48)



●LINEで確認 ウィスキーボトルの棚にガードやロープで落下防止策をしているが、3月の地震では被害が出た。パーテナー協会では、LINEのグループで災害時に安否確認をしている。仙台銀座でも身近な連絡網の準備



など、できることから進めたい＝町内会幹事・メインバー・オークルーム経営・菊地健さん(46)



●皆で取り組みを マージャン荘なのでお客さんは男性が多く、私の方が助けられることが多い。この辺りに来るお客さんは土地勘がない人もいます。避難場所と経路が一目で分かる地図がほしい。自分の店だけでなく、町内会全



体のことを考えて皆で防災に取り組んでいきたい＝町内会会員・麻雀みどり経営・小林英子さん(90)

●地域と協力する 震災時は県外客の避難誘導が大変だった。社内で備蓄はしているが、当時を知る人が少なく、対応を記録しなかったことを反省している。災害時に従業員がけがなく働けて仕事に集中できるのは大事。地域の

利用客の安全確保探る



自身の被災体験を披露しながら対策について意見を交わした仙台銀座親和会のメンバー＝3日、仙台市青葉区中央の平和住宅情報センター

昭和感漂う飲み屋街

仙台銀座 50年代に2度大火

仙台銀座はJR仙台駅にほど近い飲み屋街だ。オフィスビルやホテルが並び、都市の風景が漂う。新陳代謝が活発な南町通と東二番丁通が交わる一角にあり

洋食、中華、焼肉、バー、喫茶などの飲食店が占める。戦後、仙台空襲で焼け出された物販店などが、長屋で商いを再開したのが起源とされる。1952年と55年に大火に見舞われた。その後、居酒屋などが店を出し、現在の飲み屋街の原型ができたという。



日が暮れて看板に明かりがともった仙台銀座＝仙台市青葉区中央



QRコードで接続すると、仙台銀座の街並みとむすび塾参加者のお店・事務所を動画で見ることができます

明かりの事前準備必要

石巻市の日本料理店「八幡家」おかみ 阿部紀代子さん(60)



たどり着くお客さんが少ないことも実証実験で分かった。避難経路の説明の仕方を仲間と共有することが大事。お客さんと力を合わせて逃げることで、より安全な避難につながる。

訓練をするときは私も手伝う。仙台銀座は安心して飲んで食べられる場所であってほしい。

夜 電気を消すと考えている以上暗闇になる。お客さんとスタッフの見分けがつかなくなったり、店内を思うように動けなかったり、思いがけないことが起きた。前もってライトや蓄光テープを準備してほしい。

■助言者から

考える必要がある。災害対応は一人や一つの店舗では難しい。「お客さんに助けてもらっている」という話が出たように、仙台銀座には客の協力が得られる土台がある。仲間だけでなく、ファンも巻き込んで備えを充実させてほしい。



老朽化した看板を改修する費用については、ここからできるお金の集め方がある。仙台銀座にはファンがたくさんいる。「仙台銀座を守るために」という合言葉でお店や街を愛する人々を取り込んだクラウドファンディング(CF)を実施してみてもいいかな。

地震だけでなく、大雨の対策も

ファン巻き込みCFを

東北大災害科学国際研究所 佐藤翔輔さん(40)

監修 減災・復興支援機構

楽しく安心 飲食店街の備え



監修 減災・復興支援機構

イラスト さとうあけみ